神戸市立博物館の活動目標と指標　26年度(2014年度)

使命（要点）
○多様な神戸文化の特徴と東西文化交流の態様を明らかにし、地域の発展に役立つ「知の拠点」となります。
○優れた文化・芸術にふれあう機会を「提供」し、新たな調査・研究を「提案」し、その成果を「発信」する博物館となります。
○市民・利用者が集い、神戸を愛し、誇りとする拠りどころが得られる博物館になります。
○震災と復興のなかで得た知見を発信していきます。

活動指針
○市民が誇れる博物館　○すべての人々に親しまれる博物館　○地域の文化を支える博物館　○情報発信をする博物館

「神戸市教育振興基本計画」の４段階評価の基準に準じる

段階評価の基準について
A　目標が十分達成されている（9割以上）
B　目標がほぼ達成されている（7～8割以上）
C　目標の達成がやや不十分である（5～6割以上）
D　目標が達成されていない（5割未満）
F　評価が困難

活動目標 ◎活動内容　【目標　計画】 ○戦略・方向性 □指標	評価					内部評価
	参考数値	評価				
	参照.比較値(過年度実績等)	目標値 a	実績値 b	達成率 b/a	コメント（必要な場合）	
地域の歴史情報や未来の指針が得られる博物館にします 文化財を保存・継承していく博物館にします	地域の歴史の調査・研究は、テーマを絞ったものではあるが、ほぼ計画通りに組織的に取り組め、特別展開催の目標に向け進んでいる。このような取り組みを、今後も継続的に行う事が必要である。情報発信は自主企画展や講演により最新の地域の歴史情報を伝えるとともに、26年度後半期からは新たにFacebook、TwitterなどのSNSによる情報発信手段も加わった。また、館蔵品情報はGoogle Art Projectを利用した高細精画像での公開を開始するなど、新たな取り組みが行えた。「博物館リニューアル」に向けた検討も開始し、地域の中の博物館としての現状認識と今後の方針についても内部で共有できた。					A
◎調査・研究を積極的に行います	これまで比較的弱かった組織的な取り組みについては、特別展の開催に向けて組織的に取り組まれた。引き続きもう少し長い視点での計画的な取り組みを強めていく必要がある。					A
【目標　計画】 調査研究は収集、保存、展示などの博物館運営の基礎となる欠かせない活動であり、学芸員各自の調査研究とともに、博物館としての組織的な取組についても活性化していく。その成果を諸活動に活かし、発信していく。						
○調査研究テーマの設定と方針の明示、実績の公開	個人レヴェルも含め、テーマの設定、調査、発信、公開が例年通り行われた。具体的な目標となる特別展の開催に向けて組織的な取り組みが進展した。					A
□調査研究テーマの設定	妙法寺調査　2回 須磨寺調査　1回 綱敷天満宮　2回	26年度当初計画のとおり須磨区内の文化財調査を実施した。また、須磨に係る館内資料の把握も予定通りすすめられた。 27年度の『須磨の歴史と文化展』が予算化され、須磨区役所とも連携し、区役所において関連講座の予算化がなされた。				A
□調査件数	22年度　39箇所 23年度　33箇所 24年度　68箇所 25年度　74箇所 26年度　70箇所	学芸員各自が調査テーマを設定し、それに基づき積極的に調査を行っている。調査件数も過去最高となった昨年とほぼ同数となった。 今後も学芸員各自の研究を広げ、掘り下げ、その成果を広く還元できるよう努力していく必要がある。				A
□研究成果発信数	22年度　68件 23年度　69件 24年度　81件 25年度　60件 26年度　65件	個人レヴェルを含めた研究成果の発信件数は、昨年に比し５件増加した。博物館としては、所蔵資料や関係作品の調査をもとに、紀要・目録・博物館だよりの刊行を行った。 また、学芸員の研究成果を反映した展覧会「びいどろ・ぎやまん・ガラス」を開催し、展覧会図録の制作も行った。				A

◎地域の歴史に関する情報を発信します	タイムリーな話題をテーマにした展示や、地域に出かけての講演会などは関心を集めやすく、また当館のポテンシャルを示す上でも意味あるものであり、連携を充分はかりながら期待にこたえていく必要がある。			A		
【目標　計画】 多様な神戸文化の特徴を調査し、その成果を発信することは当館の重要な使命の一つである。地域に関する資料を収集、整理、保存し、また地域の歴史や地域に残る資料の調査などにあたり、その情報、成果を発信する事業などを恒常的に実施するとともに、有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域と期間を限っての調査活動を重点的に実施し、発信する事業にも取り組む。情報発信にあたっては、市民、利用者のニーズにあわせ、様々な媒体を使って積極的に取り組むとともに、成果を市民と共有していく手立てを講じることで、博物館が地域の発展に欠かせない存在になるよう寄与していく。						
〇有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域の歴史を調査し、その情報を発信する事業を展開	例年通りの取り組みに加え、ギャラリーで神戸ー大阪鉄道開通140年を記念して鉄道会社と連携して展覧会を開催したことは意義ある取り組みとなった。			A		
□自主企画の特別展・企画展の開催	22年度：特別展2回、企画展1回、ギャラリー3回 23年度：特別展2回、ギャラリー3回 24年度：特別展1回、ギャラリー3回 25年度：空調改修により自主企画展なし 26年度：特別展1回、企画展2回、ギャラリー2回	自主企画特別展「ギヤマン展　あこがれの輸入ガラスと日本」（7月5日～9月15日）、企画展「池長孟が愛した南蛮美術」（7月5日～8月17日）・「伊能図の世界―館蔵品一挙公開」（8月23日～9月15日）、ギャラリー「絵画コレクション展」（6月28日～8月17日）・「上川庄二郎鉄道錦絵コレクション名品選」（8月19日～10月5日）を開催し、学芸員の研究成果に基づき所蔵品や出品作品を展示することができた。			A	
□その他関連事業の開催	平成26年度： 博物館をたのしむ3回のうち3回 ミュージアム講座6回のうち4回 こうべ歴史たんけん隊1回 各勤労市民センター・神戸市立博物館連携事業 10回	26年度は、博物館をたのしむ、ミュージアム講座とも地域関連の講座が多かった。また、例年実施しているこうべ歴史探検隊に加え、25年度から開始した各勤労市民センターとの連携で各地域に根ざした活動を10回行うことができた。幅広い地域の多様な年齢層に地域の歴史や美術について理解を深めていただくことができ、意義ある取り組みとなった。			A	
□地域資料の展示	・銅製鍍金経箱（温泉寺伝来品）　2点 ・紅塵荘関係資料 ・ギャラリーでの地域資料展示　10件	常設展示、みてコレ、ギャラリーで地域関連資料を展示することができた。特に神戸ー大阪鉄道開通１４０年を記念して鉄道錦絵などをギャラリーで展示し、好評だった。			A	
□新聞雑誌や講演会での情報発信数	22年度:図録4、紀要論文4、だよりノート2、個人の館外発信29件 23年度:図録2、紀要論文2、個人の館外発信22件 24年度:図録3、研究紀要5、個人の館外発信数19件 25年度:図録2、研究紀要2、個人の館外発信数20件 26年度:図録１、研究紀要3、個人の館外発信数49件	各自の研究テーマに基づく執筆、館外講演などの発信数は過去最高となった。各自の調査研究が進展し、社会に求められた成果といえる。一方、図録、研究紀要による発信数は減少傾向にある。組織としてテーマを設定し、発信できる体制づくりを進める必要がある。学芸員がそれぞれの専門分野で、資料の保存についての相談、資料調査、調査成果の地域への還元（執筆、講演）など、例年以上に充実した活動を行った。今後とも地域の歴史や文化の拠点となるよう積極的に地域と関わり、情報発信していく必要がある。			A	
□地域史に関する対応件数	22年度　地域史関係143件、その他16件 23年度　地域史関係204件、その他15件 24年度　地域史関係138件、その他17件 25年度　地域史関係133件、その他14件 26年度　地域史関係　79件、その他14件	10月より画像提供業務のうち商業利用目的の画像提供が外部委託されたため、その影響のためか問合せの件数は減少したが、地域史に関する様々な対応は委託とは関係なく従前どおり応対した			A	

	○関連資料のDBの構築	26年度についてはデータの新たな入力を行わず、27年度以降の超高精細画像の公開に向けた準備を行った。いくつかの資料については先行して新規撮影・ネット上での公開を行った。				F	
	□DBの利用数	データベースの形での公開は0	Google Art Project による超高解像度画像の公開が可能となり、地域の歴史関連資料についても、絵画・地図資料を中心に新規撮影に着手。26年度はバーナードの水彩画4点を撮影公開。居留地設計図・兵庫神戸実測図についても撮影を完了し、27年度の公開を準備。				F
◎「東西文化交流」と神戸の歴史に関わる文化財を永続的に収集します	資料の収集は、博物館の日頃の活動の成果といえる。今後とも所蔵者との信頼関係を醸成していく必要がある。また購入予算は十分とはいえないが、収集に遺漏がないように引き続き改善を図っていく必要がある。				A		
【目標　計画】神戸の地域関連、あるいは東西文化交流に関わる資料について、その散逸を防ぎ、可能な限り収集するのは、博物館の重要な機能のひとつである。価値の高い資料を分野に偏ることなく収集することが求められる。							
	○特色ある館蔵品等の充実、収集方針の明示と実績の公開	各分野で方針に沿った収集が行われている。購入は十分とはいえないが、寄贈では地元の得がたい資料や当館のコレクションをより充実させる資料を受け入れており、日頃の活動の成果といえる。26年度は寄託の依頼はなかったが、必要度の高い資料については対応していく必要がある。				A	
	□資料収集（購入）	22年度：　9件　4,054,948円 23年度：10件　3,118,448円 24年度：16件 12,482,750円 25年度：７件　　834,300円 26年度：10件　1,226,434円	歴史資料：５件440,924円、美術資料：４件731,000円、古地図資料：１件54,510円、合計10件1,226,434円を購入した。歴史、美術資料、古地図資料ともに当館の収蔵品として相応しいものを購入することができ、十分に評価できる。				A
	□資料収集(寄贈)	22年度：12件 5,076点　評価額　40,090.9千円 23年度：10件 8,325点　評価額　805,342千円 24年度：６件　752点　評価額　1,376.9千円 25年度：４件　　４点　評価額　　30千円 26年度：85件　463点　評価額17,997.525千円	歴史、美術、古地図資料の各分野にわたって貴重な資料の寄贈を受けた。特に南波松太郎旧蔵地図皿コレクション及び紅塵荘関係資料は、既存のコレクションとの関連も深く、充実した内容となった。				A
	□資料収集(寄託)	22年度：　6件8点(歴史、美術資料) 23年度：　0件0点 24年度：　1件3点(歴史資料) 25年度：　0件0点 26年度：　0件0点	26年度は、資料の寄託がなかった。収蔵容量の問題もあるが、展示品として活用できる資料、保存上受託の必要性が高い資料などは積極的に受け入れすることも考えていく必要がある。				C

◎社会的資産としての文化財（館蔵品）を保全し、後世に伝えます		展示収蔵環境のモニタリングはすべて規定どおり遂行することができた。清掃や殺虫・燻蒸作業のなども必要な処置をすべて行うことができた。今後もより良いモニタリングの手法を検討しつつ、展示収蔵環境の監視をもれなく遂行したい。資料補修は重要な資料の修復を遂行することができたことが評価できる。			A		
【目標　計画】収蔵資料の永年保存は他の公共施設と一線を画する博物館の中核機能である。しかし、博物館に収蔵されている資料も、ひとたび注意を怠れば、重大な破損・滅失の危機に直面する。化学的殺虫殺菌処理にたよらない、日常的な監視態勢と迅速適切な処理（IPM）が、博物館・美術館業界の資料永年保存の標準となっている昨今において、その完全な遂行は博物館の重大な使命として位置づけられる。							
	○方針の明示 ○良好な収蔵環境の整備	規定どおりのモニタリングと殺虫・燻蒸処理が行えたが、今後は展示環境のモニタリングの強化も望まれているため、効果的な手法を検討する必要がある。収蔵庫清掃の機会も適宜増やす努力が必要と思われる。			A		
	□収蔵（保存）環境の調査・整備（IPM）	温湿度測定　毎週×3ヶ所 虫類のモニタリング　毎月×49ヶ所 生物環境調査　6月・9月実施 収蔵庫定期清掃　全面1回ほか部分清掃 殺虫作業　1回、　燻蒸作業　1回	モニタリング、生物環境調査、殺虫、燻蒸作業を予定どおり行い、適切な収蔵庫環境を維持することが出来た。定期清掃については、資料の状態把握という観点からもより一層頻繁に行っていく必要がある。			A	
	○資料の保全	織田信長像をはじめとする重要な資料の修復を遂行できたことは、大きな成果である。今後も限られた予算の中で、効率的で適切な補修事業を行っていきたい。			A		
	□資料の補修	22年度：　35点 23年度：　79点 24年度：　７点 25年度：　４点 26年度：　３点	26年度は、27年度以降に予定される展覧会で活用が予定される資料2点を含む３点を修理できた点評価できる。 特に、国指定重要文化財「織田信長像」の修理を国の補助事業として実施できたことは大きな成果といえる。（平成27年6月完成予定）			A	
	○大震災による被災の教訓と復旧・復興の記録の公開					F	
	□大震災の記録の利用	22年度：9747件 23年度：10932件 24年度：11447件 25年度：不明 26年度：不明	震災の記録についての問い合わせは多く、ホームページを紹介し、利用していただいている。しかし、25年度から市役所全体のシステム変更によりホームページへの頁単位のアクセス件数がカウントできなくなったため利用数の測定は不可能となった。			F	

◎館蔵品に関する情報開示の整備をおこないます	博物館館蔵品DB（データベース）の公開については、技術的・コスト面での制約で実現していないが、引き続き検討。その間のつなぎとして、Google Art Projectを利用した高精細画像で公開を開始するなど、新たな展開を加える事ができたのは評価できる。						B	
【目標　計画】 博物館の所蔵品は神戸市民、そして本市の歴史文化と東西文化交流に関心を寄せる全ての人々の共有財産であるとする観点から、その情報を可能な限り公開することが望まれる。特にインターネットを媒体にしたデーターベース公開の実現を目指すべきである。								
○館蔵品情報目録の継続的な発信発行	館蔵品目録については所定の刊行予定を遂行することができた。ネット上での情報公開ではGoogle Art Projectなどあらたな公開手法を導入した。						A	
□館蔵品目録の継続発行	美術の部・歴史の部各1冊を刊行	美術の部・歴史の部各1冊を刊行	美術の部・歴史の部各1冊を刊行	100%	目標どおり、紀要、目録（美術・歴史）を紙媒体で発行し、年報はPDFファイルで作成し、ホームページで公開した。			A
□館蔵品の特別利用数	22年度特別利用：740件 23年度特別利用：811件 24年度特別利用：748件 25年度特別利用：754件 26年度特別利用：417件	377件 1247点	417件 1991点	109% 159%	画像利用のうち商業利用目的の画像提供が26年10月から外部委託した。その影響のため、利用件数は例年より少なくなったが、目標値より多い結果となった。			A
□ホームページへの掲載	名品撰で公開中の240件に加え、その内の103件を超高精細画像とともにGoogle Art Projectで公開。	博物館HPでのデータベース機能を付加することは技術的・コスト的な制約が多く、需要も不透明なため、引き続き検討する。Google Art Projectに103点の作品に関する超高精細画像を10月27日より公開。						A
○博物館資料DBの構築	26年度は、Google Art Projectへの参加や、画像提供の新しい制度に伴う、画像データ整備に作業の重点が置かれたため、新規の情報追加・画像入力は行われなかった。博物館リニューアルも鑑みながら、27年度は、将来の情報公開に備えたDB整備に着手したい。						F	
□データーベースのアクセス件数		データーベースの公開については、その基幹となる画像アーカイブの構築が急務だが、神戸の地域史に関わる資料の入力で一部進捗が止まっている分野（絵葉書・古写真・絵地図・池長孟関連資料など）がある。コストや労力のかかるデータベース公開だけが唯一の選択肢ではなく、名品撰・Google Art Projectなどでの画像公開も積極的に展開すべきである。また新たなDB・情報公開システムについて、博物館リニューアルとあわせて検討すべきである。						F

すぐれた芸術・文化に出会える博物館にします	3つの大型特別展は、西洋美術、日本美術、歴史と分野のバランス、内容、入館者数とも良好な展覧会が開催出来た。常設展示とコレクションの展示を中心とした博物館リニューアル計画が始動し、将来展望に立った博物館の在り方について内部での検討と外部意見を活かし、より親しみ、学べ、すぐれた芸術・文化に出会える博物館を目指す必要がある。							A		
◎楽しく学べる魅力的な常設展示を行ないます	常設展示のﾘﾆｭｰｱﾙに向けて、27年度に外部の有識者による検討委員会が開催される予定となり、大きく前進できた。リニューアルまでは従前どおり工夫を重ねて魅力作りをしていく必要がある。								A	
【目標　計画】 常設展示（ギャラリーを含む）は館の特色を最も発揮し、展示活動の基本となるところである。日常的な取り組みの活性化を図るとともに、学習室を除いて大幅なリニュアルが行われていない現状を踏まえ、将来に向けた準備も行っていく必要がある。										
〇常設展示の内容の更新・拡充・整備	一部資料の展示替えや展示方法の工夫など、さまざまな努力が払われている。しかしながら現状の設備や旧来のシナリオでは神戸の歴史の魅力を十分にアピールできているとはいえない。これまでの実績をもとにリニューアルに向けて準備を進めていく必要がある。									A
□展示替え	22年度：34回 23年度：24回 24年度：23回 25年度：22回 26年度：19回	常設展示のテーマの中で、学芸員各自の研究成果を反映させながら計画どおり展示替えを行うことができた。								A
□常設展示内容	今まで展示を行っていなかった資料なども展示 入館者により分かりやすい展示を心がける	リニューアルに向けた計画が進行中であるが、実現するまでは、現状のテーマの中でより分りやすく充実した展示を行っていくよう努める。								A
□展示解説開催数	22年度：84日、873人、平均 11人 23年度：61日、271人、平均 4.4人 24年度：69日、321人、平均 4.7人、 参加者のいない日数15日 25年度：13日、 49人、 平均 3.2人、 参加者のいない日数 3日 26年度：32日、144人、平均 4.5人、 参加者のいない日数 9日	参加者1日平均5人程度	26年度：32日、144人、平均4.5人、参加者のいない日数9日	90%	26年度は、常設展のみの開館日は32日、1日平均の参加者はほぼ目標どおりとなった。					A
□展示設備・施設の改修	内部での検討会を含む会議開催回数　26年度：20回	常設展示の改修に関しては、内部での検討会を実施、それをまとめた案を政策会議に提出し、市長に説明を行った。その案をもとにリニューアル基本計画の策定を支援するための委託業務が予算化され、リニューアルに向けて大きく前進したといえる。								A

◎特色ある館蔵品をいかした展示を行います	コレクションをいかした展覧会は計画通り実施した。しかしながら特別展に注目が集まる現状では、十分にアピールできているとはいえない。広報面の工夫、ニーズの把握を含め、引き続いて改善を図っていくとともに、リニューアルの中でより効果的なアピールの方法を検討していく必要がある。					A		
【目標　計画】 特色あるコレクション、調査研究の成果を生かした展示は博物館の基本となる活動であり、館の力量が問われるところである。常設展示（ギャラリーを含む）以外に、南蛮紅毛美術、古地図などの企画展、調査研究に基づいた自主企画の特別展をそれぞれ少なくとも年間1回は開催し、魅力を発信する								
〇調査研究に基づく自主企画の特別展・企画展の開催 〇南蛮・古地図の企画展の開催	当館の強みである館蔵品を展示する機会が限られている現状にあって、特色をアピールする語句をつけた特別展、企画展となった。入館者数、利用者ニーズの把握の点で課題を残している。						A	
□展覧会開催	特別展「ギヤマン展　あこがれの輸入ガラスと日本」 企画展「池長孟が愛した南蛮美術」 企画展「伊能図の世界一館蔵品一挙公開」	特別展「ギヤマン展」では、桃山から江戸時代、そして明治時代前期に日本にもたらされたヨーロッパ製ガラスの実像に迫り、日本への影響にも目を向ける初めての展覧会となった。南蛮、古地図企画展では、公開する機会が少なくなっている館蔵品の名品を展示できた。						A
□入館者数		特別展「ギヤマン展」 40,000人	32,981人	82%	目標入館者にはわずかに届かなかった。			B
□満足度	22年度：「川西祐三郎展」　88.22 22年度：「ワイドビューの幕末絵師貞秀」　85.11 23年度：「和ガラスの神髄」　82.51 23年度：「日本絵画のひみつ」　79.31 24年度：「南蛮美術の光と影」　86.06 24年度：「国宝桜ヶ丘銅鐸の謎に迫る」　85.70 26年度：「ギヤマン展　あこがれの輸入ガラスと日本」 84.77	特別展「ギヤマン展」の満足度はほぼ目標値どおりにすることができた。集計や自由コメント欄のコピーは不足なく行えたが、これらの情報を展覧会ごとに集約し、次の展覧会に活かす取り組みがまだなされていないので、27年度以降の課題としたい。						A
◎海外展などの特別展を開催します	多岐にわたる特別展によって、市内外から博物館に来館する機会を多くの人々に提供でき、目標とする25万人/年の数字は達成できた。27年度についても、マスメディアとの共催特別展において、質の高い作品を紹介していくことが望まれるとともに、自主企画の市内外からf特別展でも魅力を発信していくことに努めたい。					A		
【目標　計画】 博物館は人々がすぐれた文化財と対話できる場でなければならない。国内外の博物館施設、または新聞社等のマスメディアと協働し、質の高い大型展を年に1～2回の頻度で開催する。そのための財源確保、広報計画など広範囲な業務を事前の計画の下、実施する。								
〇国内外のすぐれた資料、作品を展覧会で紹介	予算の想定人数に満たない展覧会もあったが、北斎の浮世絵・古代エジプト・チューリヒ美術館所蔵資料など、海外の美術館の名品を紹介できたと考えられる。入館者が想定を大幅に上回った北斎展については、運営のあり方を今後の展覧会に活かしていくことが望まれる。これらの展覧会を紹介する、イブニングレクチャーを各展覧会において開催したことは意義あることであった。						A	

		□特別展開催	「ターナー展 英国最高の風景画家」 26年1月11日～4月6日 「ボストン美術館　浮世絵名品展　北斎」 4月26日～6月22日 「メトロポリタン美術館　古代エジプト展　女王と女神」 10月13日～1月12日 「チューリヒ美術館展」　1月31日～5月10日	浮世絵、古代エジプト関係資料、近現代絵画と幅広いジャンルに及ぶ質の高い作品を展示し、多くの来館者を迎えることができた。特にボストン美術館展においては想定をはるかに上回る入館者が訪れた点は評価できる。							A
		□入館者数	「ターナー展 英国最高の風景画家」 「ボストン美術館　浮世絵名品展　北斎」 「メトロポリタン美術館　古代エジプト展　女王と女神」 「チューリヒ美術館展」	ー 90,000人 210,000人 128,979人 ※26年度のみ 計　428,979人	19,561人 （3,260人／日） ※26年度のみ 144,022人 （2,770人／日） 143,307人 （1,726人／日） 119,027人 （2,320人／日） ※26年度のみ 計405,651人	ー 160% 68% 91% 計95%	ボストン美術館展は、大きく目標を上回り、チューリヒ美術館展はほぼ目標どおりの入館者となった。メトロポリタン美術館展は目標入館者に届かなかった。				A
		□満足度	22年度:「ボストン美術館浮世絵名品展」 80.54 「古代ギリシャ展」 83.69 23年度:「山本二三展」 84.17 「平清盛」 77.44 24年度:「マウリッツハイス美術館展」 81.60 「中国王朝の至宝」 82.11 25年度:「プーシキン美術館展」 83.54 「ターナー展」 82.43 26年度:「ボストン美術館展　北斎」 83.53 「メトロポリタン美術館展」 82.04 「チューリヒ美術館展」 82.24	入館者の多い展覧会では満足度85以上の目標到達が難しい。北斎展は会期前半は満足度85以上をキープしたが、入場待ち列が1時間以上となった後半に急落した。メトロポリタン美術館展、チューリヒ美術館展は会期を通じて目標を下回った。							B

芸術・文化を介して、利用者が広く交流できる博物館にします	学校との連携は、これまでどおり出張授業の校数では限界の状態で実施しており、展覧会毎のワークショップ、さらには学習支援交流員主導によるワークショップも積極的に展開してきている。新規教材の開発も視覚障害者対象の館蔵品解説パネルなど、新たな教材開発が行われ27年度も継続する予定である。今後の課題としては、おきしお号のより一層の活用方法を考える必要がある。他館との連携では館蔵資料の貸出以外に、当館企画の展覧会（ギヤマン展）を奥田元宋・小由女美術館で開催したこと、また他館との共催でシンポジウム（国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈発見50周年祈念シンポジウム）を開催するなどの成果があり、今後も連携の強化に努めていくことが必要である。	A			
◎学校との連携を図ります	学校との連携は十分図れている。今後とも博物館活動の柱の一つとして充実させる必要がある。		A		
【目標　計画】 博物館が所蔵している特色ある資料をもとにした教材の開発や展覧会独自のワークショップ等を行い、来館者への機会の提供かつ出張授業等に積極的に取り組むことが博学連携の在り方としては不可欠となっている。将来に向けても学校と連携を図り利用の場としてあるように、プログラムの蓄積と整備を計画・実施していく必要がある					
〇学校との連携	学校との連携は、十分図れている。今後は、新しいプログラムの開発などソフト面の整備が必要である。			A	
□小・中・高等学校の受入数	22年度　幼 :1　小 :52　中　83　高 44　その他 55 23年度　幼 :0　小 47　中 165　高 49　その他 54 24年度　幼: 0　小:　4　中　80　高 26　その他 62 25年度　幼 :0　小 25　中　50　高 19　その他 15 26年度　幼: 0　小 43　中　97　高 34　その他 36 （その他は大学・専修学校など、単位は校） トライやる 22年度：13校30人、23年度：15校29人、24年度：13校28人、 25年度：11校19人、26年度：13校24人 合計 22年度：248校9,577人、23年度：330校10,681人、 24年度：185校7,942人、25年度：120校4,972人、26年度：223校9,475人	学校園の要望に沿ったかたちで、来館への対応、オリエンテーション（来館校園のうち23.3%）、またトライやるの受入など、適切な受入が図られている。			A
□連携数（出張授業等のアウトリーチ数、教材の貸出数）	※単位は校 22年度　保：1　小：87　中：14　高：2　大：1　計105 23年度　幼：0　小：23　中：18　高：6　大：4　計 52 24年度　幼：0　小：95　中：14　高：1　特別支援：1　計111 25年度　保：1　小：103　中：12　高：0　特別支援：2　計118 26年度　保：0　小：121　中：７　高：3　特別支援：1　計132	可能な限りでの広報活動や学芸員と指導主事の体制づくりを進めることができた。			A
□教員研修の受け入れ	22年度　5回301人　23年度　5回157人　24年度　8回392人 25年度　3回114人　26年度　6回145人	26年度は「先生のためのミュージアム活用術」など新たな研修会を実施できた。 ①先生のためのミュージアム活用術16人、②中学校教育課程研究協議会（社会科）65名、③三重県立高等学校地歴科研修会23名、④初任者研修3名、⑤高丸小学校研修会7名、⑥中学校社会科研修会31名、合計6回１４５人			A
□大学との連携事業数	22年度：16校28名　23年度：18校29名　24年度：17校26名 25年度：16校21名　26年度：17校26名 神戸市外国語大学との連携事業 「桃山・江戸絵画のグロバリゼーション」　44名	博物館実習では、館の概要、展覧会開催までの流れ、資料保存、資料の取り扱い、収蔵庫清掃、倉庫の整理など、現場でしか体験できない、実習生にとって実践的かつ有意義なプログラムを提供することができた。また、神戸市外国語大学との連携事業も引き続き実施され、44名の参加者を得た。			A

	〇教育普及プログラムの確立	文化庁補助事業により、5件の教材を制作することができた。これを活用したプログラムを開発し、その有効性を確認する必要ある。				A
	□教育普及プログラム数・内容更新	●教育普及プログラム 1. 国宝　桜ヶ丘銅鐸　3校 2. 古代生活の体験をしよう　22校 3. 土器と埴輪をつくろう　1校 4. 源平合戦図屏風からみえる平家物語　19校 5. はるかなる西洋　22校 6. 伊能忠敬の日本地図　16校 7. 神戸からみえる文明開化　23校 8. 水墨画入門　3校 9. 浮世絵入門　18校 10.港の発展　1校 11.六甲山とグルーム　1校 ●おきしお号　35校 ●新規開発教材 1. 触れる浮世絵版木制作（凱風快晴） 2. 触れて観察する銅鐸製作 3. 点字・触図を使用した解説パネル 4. 摺り体験用浮世絵版木制作 5. ミニチュア銅鐸（1号銅鐸）体験キット制作	26年度も学校での学習内容をより深く理解するために用意した当館の教育普及プログラムを市内各所の学校で実施し、効果を得た。また、おきしお号の出動回数も35校に及び、博物館が展開する新たな教育普及用のツールとして認知されてきた。 教材の開発については、文化庁の平成26年度文化芸術振興費補助金（地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業）において新規教材5件を開発できた。26年度以降活用を図っていきたい。			A
	□子ども向け事業の展開	1. こどもの日スペシャル　5/5　79人 2. 博物館たんけん隊　7/26　54人 3. 夏休み土器づくり教室　7/19・20、8/2　78人 4. ジュニアミュージアム講座　計　6回　105人 5/24 「楽しく学ぶ浮世絵(1)～きみも摺師に挑戦～」17人 6/14 「楽しく学ぶ浮世絵(2)～立版古を作ってみよう～」18人 7/12 「ギヤマン彫りに挑戦しよう」 19人 11/15 「ガラスのﾍﾟｰﾊﾟｰｳｪｲﾄに女神をデザインしよう」　18人 11/29 「石を彫ってお守りを作ろう」 17人 12/13 「木の手鏡に彫刻をしよう」　16人 5. 子供向けワークショップ「ゴッホの絵を立体絵画にしてみよう！」 2/14　参加者　14人 6. こうべ歴史たんけん隊　3/21　20人 7. 春休み親子鑑賞会　3/28　82人 8. 学習支援交流員によるワークショップ 8/3, 8/9, 8/10, 8/23, 8/24, 8/30　166人	26年度も多くのプログラムを提供し、博物館資料や博物館が開催する展覧会、神戸の歴史や美術にふれて、体験しながら学んでいただくことができた。学習支援交流員によるワークショップも充実してきた。27年度も楽しむことができ、学ぶことができるプログラムを提供していきたい。			A

◎地域との連携を図ります	メディアなどとの共催による展覧会では、各種団体の協力に多くを委ねることになるが、地域の博物館として地元と密着した協力体制は今後とも継続していくことが望まれる。また、新たな課題を設ける必要もあろう。				A	
【目標　計画】 博物館はその立地する地域と不可分の存在である。博物館は地元の文化財のみならず、生活する人々とその活動すべてに関わりを持たねばならない。博物館はその事業を計画・実施する際に地域の学校や社会教育施設、文化団体、商業施設やマスコミなどと連携を重視しなければならない						
〇居留地協議会、周辺商店街等との連携	従前どおりの活動に加え、各種団体や地域とも連携が図れているが、今一度まわりを見渡して、地域との協働を検討すべきと考えられる。				A	
□連携数など	勤労市民センター・神戸市立博物館連携事業　10回 5/10 「ボストン美術館浮世絵名品展をたのしむために」 75人 6/14 「古地図から知る神戸の歴史」 15人 6/21 「ながた歴史散歩　浮世絵や屏風にみる源平合戦」 13人 9/6 「池長孟が愛した南蛮美術」　34人 7/19 「ギヤマン展を楽しむために」　37人 10/4 「近世兵庫津の事件簿」 47人 10/25「ﾒﾄﾛﾎﾟﾘﾀﾝ美術館古代ｴｼﾞﾌﾟﾄ展をたのしむために」 78人 11/23「太山寺歴史探訪教室」 27人 2/11 ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ「ﾁｮｺﾚｰﾄでつくる卑弥呼の三角縁神獣鏡」 11人 2/28 「チューリヒ美術館展をたのしむために」　75人	25年度から始まった勤労市民センターとの連携事業は26年度、さらに充実し、博物館の展覧会の広報につながり、神戸の歴史、所蔵品の理解を深めるよい機会となっている。みなと銀行本店ロビーに北斎展ポスターを掲示。旧居留地協議会はメンバーとして会議に参加し、協力関係にある。 三宮センター街1丁目、2丁目の各商店街振興組合の協力を得て、北斎展、ギヤマン展、メトロポリタン美術館展、チューリヒ美術館展のバナー、ポスター掲示を実施。			A	
□共催事業など	8/10 「みなと銀行発足 15 周年記念イベント グラスアートを作ろう」 28組32人	みなと銀行発足15周年を記念して実施したワークショップ。30組限定の募集に対し78組もの応募があり、製作した作品も力作そろいで非常に好評であった。27年度も実施予定。			A	
〇生涯学習の支援	平成26年4月1日に神戸市いきいき勤労財団と連携協定を締結し、勤労会館や勤労市民センターでの事業をより充実させることができた。今後はソフト面での充実が必要である。				A	
□連携数（出前講座・講師派遣など連携事業数）	22年度　25件 23年度　23件 24年度　31件 25年度　30件 26年度　33件	神戸市外国語大学との協定に基いた共同企画セミナー「桃山・江戸絵画のグローバリゼーション」など、積極的な相互交流を行った。また大学、関係機関、地域の講座への講師派遣も積極的に行った。			A	

◎他の博物館・美術館との連携を図ります		資料の貸出や他館との連携は図れている。また、シンポジウムの開催という点では、連携のみならず、研究成果を広く社会に問うきっかけになったと考えられる。今後とも継続していくことが望まれる。			A		
【目標　計画】 博物館は単独では存続し得ず、常に他の博物館・美術館と連携し、協力しなければならない。それは日本国内のみならず広く世界的な範囲で交流すべきで、そのためには館を支える学芸員の切磋琢磨とそれを支える体制作りが必要である。							
	〇他の博物館・美術館等との情報交換、連携事業の展開	奥田元宋・小由女美術館（広島県三次市）での特別展「ギヤマン展」のほか、館外への資料貸出については従来どおりなされている。また、九州国立博物館との共同研究、国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈発見50周年記念事業シンポジウム 「国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈の謎に迫る」など多彩な事業が展開できた。東日本大震災に関しては全国美術館会議の諸活動やシンポジウムなどに職員を派遣して、活動を行っている。			A		
	□他館での館蔵資料の発信	22年度：申請数36件（貸出先37件）231点 23年度：申請数31件（貸出先32件）135点 24年度：申請数30件（貸出先33件）153点 25年度：申請数27件（貸出数27件）556点 26年度：申請数31件（貸出数31件）582点	考古・歴史・古地図・美術の各分野の展覧会にバランスよく作品を貸し出す結果となっている。 これまでの貸し出し実績も含めて、南蛮美術の一部作品に貸出が集中する傾向にあり、作品の状態を充分に確認・協議したうえで、他館での展示に協力した。				A
	□他館での委員、講師など	他館での評価委員、講師、他都市審議会委員など 22年度：17件 23年度：25件 24年度：50件 25年度：33件 26年度：33件	考古、歴史、美術、古地図の各分野においてそれぞれの研究成果の発信や、資料の評価委員、博物館設立のための委員など幅広い活動を実施した。また東日本大震災に関連して職員を派遣した。				A
	□他館との共催事業	九州国立博物館との共同研究「国宝桜ケ丘銅鐸の総合診断調査と今後の保存活用　―発見50年目を迎えるにあたって―」など	九州国立博物館との共同研究の成果は、平成24年度開催の特別公開「国宝・神戸市桜ヶ丘出土銅鐸」(7/17～9/29)、さらに、国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈発見50周年記念事業　シンポジウム 「国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈の謎に迫る」において展示・発表し、博物館資料の新たな魅力を市民に広く知らせることができた。 ギヤマン展では、三次市に巡回することで、他の地域へも当館所蔵品の魅力をアピールすることができた。				A

◎各種講座を一層充実します		新企画の講座はないが、長年実施している講座が多くの市民・参加者に認知されていると思われる。今後、より一層の充実が求められる。					A	
【目標　計画】 生涯学習の場として、博物館は社会教育施設のなかでも欠かせない存在である。来館者に対して講座等を積極的に行うことで、展覧会理解、館蔵資料、各自の研究成果を発信し、博物館の魅力を伝えていく								
○講座内容の開発、充実		各種講座の開催により、生涯学習の場としての機能を果たしているものと考える。また、館蔵資料の魅力も伝えていると考える。しかしながら、より一層の充実が求められる。					A	
	□事業数	1．ミュージアム講座　6回 2．博物館を楽しむ　3回 3．国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈発見50周年記念行事　3回 4、特別展覧会関連講演会　6回 5．特別展イブニングレクチャー　36回 6．企画展ギャラリートーク　4回	ミュージアム講座、博物館を楽しむなどの定例の講座に加えて、銅鐸発見50周年関連事業や特別展関連の講演会、イブニングレクチャー、企画展開催時のギャラリートーク等、充実した事業を展開することができた。					A
	□参加者数	1．ミュージアム講座　のべ737人 2．博物館を楽しむ　のべ40人 3．国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈発見50周年記念行事　のべ365人 4、特別展覧会関連講演会　のべ888人 5．特別展イブニングレクチャー　のべ4699人 6．企画展ギャラリートーク　4回　のべ120人	1．160人 2．　20人 3．480人	各講座ともほぼ目標どおりの参加者を得ることができた。	参加者数は、特別展関連事業を含めると総数で5,000人を超える。課題としては、事前募集型の講座について、今後、申込者が固定化しないよう広報手段を検討し、新規かつ若年・中年層の参加者を増やす必要がある。			A
○利用者ニーズの把握		講座毎にアンケートを実施しており、利用者のニーズを踏まえた改善を行っている。					A	
	□利用者満足度	①「ミュージアム講座」計92名：男性33名、女性59名 興味がでた28名、　まあでた41名、 普通7名、　ややもてなかった5名、 もてなかった1名、　未記入10名 ②「博物館をたのしむ」計14名：男性9名、女性4名 興味がでた13名、　まあでた0名、 普通0名、　ややもてなかった0名、 もてなかった0名、　未記入0名	ミュージアム講座、博物館を楽しむともに多くの方が、「興味がでた」、「興味がまあでた」という結果となり、内容については満足していただいている状況である。今後ともより満足していただけるよう、講座内容、実施方法について検討していきたい。					A

◎広報活動を充実し、各種事業を広く紹介します	様々な広報メディアへの対応が必要ではあるが、近年のアンケート結果なども踏まえて、労力を集中すべきメディアを見極める必要がある。特に最近ではインターネットの影響力が高まっているので、これに的確な対応を行いたい。		A		
【目標　計画】 博物館の基本活動は資料の収集と保存、活用である。それらの活動は今に生きる人々に理解されることによって、一層の発展を遂げることができる。そのためには、展覧会広報のみならず、博物館活動すべてをあらゆる媒体を通じて知らしめる必要がある。					
〇広報活動の充実	各メディアの配布部数や掲載料の有無なども考慮に入れて、効率のよい広報活動を展開することに引き続き留意していきたい。対応回数の多い割には効果が少ない媒体への対応を如何に効率化するかが当面の課題である。			A	
□広報掲載件数	25年度と同様の割合でインターネット上の各種展覧会情報サイトへの情報提供があった。				A
〇HPの更新	昨年度並みの更新頻度とアクセス数が確保できた。FacebookなどSNSの活用で、情報発信力は強化された。			A	
□HPの更新回数、ページ数、アクセス数	博物館HPアクセス実績 各ページ（全体）　トップページ 23年度　1,639,886 24年度　3,376,130　24年度　837,815 25年度　測定不能　25年度　487,262 26年度　測定不能　26年度　715,597	HPの更新については、各種告知や訂正のタイミングを逸することなく、適切に行われた。10月7日からFacebookを開始。26年度投稿回数は109回、リーチ数77,137。10月29日よりTwitter開始、投稿数83回、37,980インプレッション。			A
◎市民ニーズを把握し、必要な改善を行ないます	アンケートの回収・集計ばかりでなく、得られた情報の迅速な分析と共有の態勢は整いつつある。		A		
【目標　計画】 博物館は地域とそこに生活する人々のために存続しなければならない。文化財の保存とそれを利用した諸活動は相互に補完しあわなければならないが、さらにそれらは市民のニーズに応えるものであることが理想であり目指す目標といえよう。市民ニーズの把握のためのツールを持つことと、その分析、さらにはその活用を図らねばならない					
〇定期的な利用者へのアンケート調査 〇非来館者を含めた意識調査	アンケート調査については、投げ入れ式で実施し、回収後はただちに回覧し、そこに記された意見については迅速に対応した。集計作業については学習支援交流員、トライやる・ウィークの生徒たちの協力を得るとともに、大型展(チューリヒ展)では業者へのアウトソーシングも実施。アンケート結果の分析と活用については、少なくとも展覧会会期前半・中間での速報総括に必要な情報がまとめられる態勢がほぼ整った。また、アンケートコメント欄のレポート化も始めた。			A	
□アンケート調査に基づくニーズ・満足度の把握		「北斎展」「ギヤマン展」「古代エジプト展」「チューリヒ展」ともコメント欄PDF化、NSI算出、回覧を毎日行なった。ただし、集計は数が多いので、会期終了後1ヶ月以内に終了させることは無理であった。チューリヒ展は、なぜか回収枚数が激増（約4千枚）し、業者委託でも全枚数の集計を諦めざるを得なかった。アンケートに記入されたキャプションの間違い等対応可能な事は、訂正するなど対応した。			A

	□HPへの掲載・公開		アンケート結果をどのような形で公開するのがよいのか、その是非を含めて検討する必要がある。				F
	□アンケート評価への対応と改善		アンケートに記入された内容で、すぐに対応可能なことは、改善・実施した。				A
◎ボランティア活動を通じて、人々が交流できる場を作ります		学習支援交流員の活動は定着しており、来館者や館外での人々との交流になくてはならないものになっている。				A	
【目標　計画】 博物館運営のなかで、人々が交流できる場として学習支援交流員は一つの姿となりつつある。しかし、単に業務の代替を求めるのではなく、独自の運営形態を職員・学習支援交流員相互で生み出す必要がある。また、活動を円滑に進めるために、ハード・ソフト両面において整備を図る							
	○ボランティア活動の実施	26年度より5年の期限を満了したボランティアの中からアドバイザーを委嘱する制度を採用した。ボランティアの手本となるよう指導を期待している。また、新たな活動にも取り組み始め、より活発になっている。				A	
	□実績（人数、回数、内容）	22年度　のべ719人/活動回数141回 23年度　のべ502人/活動回数170回 24年度　のべ643人/活動回数126回 25年度　のべ729人/活動回数120回 26年度　のべ953人/活動回数144回	平成20年度に導入して7年目となり、活動回数や活動参加総人数は過去最高となった。学習室を中心とした学習支援活動に加え、アンケートの集計、講座・イベント開催時の補助、案内業務などにも積極的に参加する態勢が整ってきた。今後の課題としては、活動に消極的な交流員が活動に参加する方法と新しい交流員が定着する方策を検討する必要がある。				A
	○活動内容の充実	館内だけでなく館外での教育普及活動においても積極的に参加しており、今や博物館になくてはならない存在となっている。引き続き自主的な活動が展開できるよう支援していきたい。				A	
	□活動内容	定例会 ワークショップ 教材開発 講座・イベントの補助など	月１回の会議などにより意思疎通を図っている。学習支援交流員自身が企画・運営するワークショップは年々充実してきている。今年度も貫頭衣を制作するなど、教材開発も積極的におこなっている。また、講座、イベント時の補助作業や館が発行する印刷物の発送業務、アンケートの集計など館の業務を支えてくれる頼もしい存在ともなってきている。今後とも、より一層の活動の充実を図っていく。				A

すべての人々にやさしい博物館にします		施設・設備の改修が必要な個所は、まだ多くあるが、人用エレベーターの改修、非常用照明設備の蓄電池交換等を実施し、安全面の改善ができた。常設展示のリニューアルにあわせて、ユニバーサルデザインへの対応を含め、必要な施設、設備の改修をすすめていく。	B			
◎誰でも利用しやすい施設、設備にします。		人用エレベーターの設備が古く、安全性が現在の基準にあっていなかったが、改修により、ユニバーサルデザインの観点からも、安全性が高まった。		B		
【目標　計画】　これからの博物館は、高齢者・障害者・外国人等誰でも利用しやすい施設・設備にしていく必要がある。そのためにユニバーサルデザインへの対応に向け、リニューアルを含め、施設・設備の総合的な改修案を立案し、具体化していく必要がある。						
	○施設の計画的な補修、改修	人用エレベーターの改修を行い、挟み込み防止などが強化され、安全性が向上した。			A	
	○省エネルギー・省資源への取り組み	省エネルギーについては、特別展示室等の新たな空調設備が導入されているが、その運転に当たって、効率的な運転方法を模索している状況にある。			B	
	□消防・建築設備等の点検、訓練、安全衛生の確保		非常照明設備の蓄電池の交換を行った。照明時間が増し、安全性が高まった。			B
	□神戸環境マネジメントシステムを生かした環境負荷の低減		コピー枚数の低減や、美化活動など、一定の成果があった。			B
	○ユニバーサルデザインへの対応	リニューアルの観点のひとつにユニバーサルデザインの観点を含めるようにしている。			C	
	□ユニバーサルデザイン取組		リニューアルがなされていない状況で、具体的な成果につながっていない。今後リニューアル実施にあわせ、ユニバーサルデザインに合致するよう努力する。			C

◎誰にでも喜ばれるサービスを提供します		大規模展覧会では、多くの方が来館されるが、見学に際してのマナーのよくないい方も多く、控えめに声をかけても、あとでスタッフに対しての苦情としてあとで出てくるケースも多く、逆に何もしなければ周りの方々の苦情となっている。大きな混乱はないが、マナー向上のためのお知らせを増やすなど努力が必要である。			B	
【目標　計画】　これからの博物館は、誰からも喜ばれるサービスを提供し、利用者から高く評価される博物館にしていく必要がある。そのためには、まず、仕事量に見合った職員・スタッフ数の確保、次に、それらの職員の能力を高めるための研修を実施していく必要があるが、まずは、この前提となる予算の確保が急務である。						
	○人的サービスの充実		建物の規模や設備の面で、苦情があった。しかしながら特に大きな問題とはならなかった。		B	
		□館内の運営協力体制	特に問題はなかった。連携を十分行うことが大切である。			B
		□職員の研修	必要な研修については、参加できるよう努力した。			B
		□利用者サービ	人用エレベータと非常灯の蓄電池の改修ができたのは、安全面からは良かった。			B
◎予算の充実に努めます		予算を確保することができ、人用エレベータ、停電時の非常灯蓄電池の改修ができた。			B	
【目標　計画】　市の予算は、非常に厳しいものがあり、毎年減少している。そのため、博物館に必要な予算を獲得していく努力をこれまで以上にに行うとともに、外部からの支援金・助成金の獲得に向け、積極的に行動していくことが必要がある。						
	○予算の充実	少しずつではあるが、改修の必要性が理解され、施設改修ができるようになっている。			B	
		□支援金・助成金の獲得	協賛金	国の補助金や財団からの補助等一定の成果はあった。今後は広い範囲からの寄付をいただけるよう検討する必要がある。		B
	○活動指標の内部評価と外部評価の実施	27年度に向けて評価にあたってできるだけ簡単な指標を用い、簡易な記述が可能な方式を検討する。また、定期的に業務評価を行う時間を設ける必要がある。			B	
		□自己点検、評価システム		各自の担当業務を把握し、定期的に評価をおこなうことが必要である。27年度以降、評価項目の見直しと記入の重点化を進める方向で検討を進める必要がある。		B